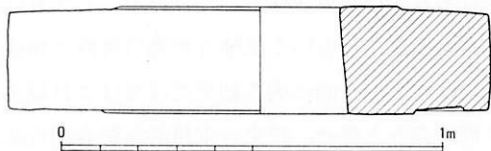
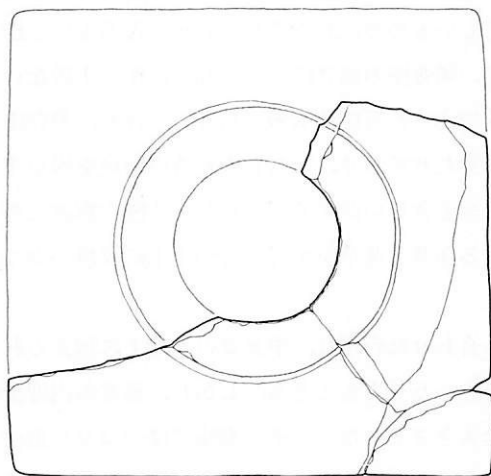


定林寺石造露盤の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・飛鳥資料館

明日村立部所在の定林寺については、1953年に石田茂作氏によって塔と回廊跡の調査がおこなわれ、1977年には当調査部が推定講堂跡西北隅と南面築地について小規模な調査を実施している。1984年2月、寺域の東に隣接する現定林寺の庫裡改築にともなう発掘調査をおこなうに当たり、庫裡の沓脱石として用いられている石材と、脇本政之氏宅所在の石造露盤断片をあわせて調査する機会を得た。その結果、両者が接合し、露盤の約2分の1を留めていることが判明したのでその概要を報告する。

沓脱石はこれまで塔上成基壇の一部とされてきたものであるが、埋没部に円孔の一部を残しており、露盤であることが判明した。また、脇本氏宅の断片とも接合し、旧形をほぼ復原することが可能である。露盤は、一辺126cm、中央部の最大厚28.4cmのほぼ正方形の紋紋岩質熔結凝灰岩（竜山石）の切石を加工したものである。中央に心柱が貫通する円孔を穿つ。円孔の上面径42.6cm、下面径46.4cmで、上面・下面とも円孔の周囲に幅約16cm、高さ0.7cmの低い突帯を、下面四周に幅約7cm、高さ約1cmの突帯をめぐらす。上面はほぼ平坦に仕上げられているが、わずかに水垂れ勾配があり、下面四周の突帯は露盤受上に固定するための装置と考えられる。なお、上面の円孔周囲の突帯は、その外径からみて伏鉢の下端を固定するにふさわしいが、下面に同様の突帯を設ける理由は明らかでない。



定林寺石造露盤実測図

塔の石造露盤は全国的にみても10数例を数えるに過ぎないが、最近、法輪寺三重塔所用であったことを示す史料が発見された法隆寺西園院所在の例とともに、本例はその製作年代の上限を明らかにしうる貴重な存在といえる。また、石造露盤は、法輪寺例のように上部に框を設ける型式と、本例のように円孔の周囲に突帯をめぐらす型式、円孔のみを有する型式に大別できるが、本例は、露盤受上に固定するための突帯を下面に設けるなど、この型式の中でも最も古い様相を示している。また、兵庫県の竜山石を用いている点も注目されよう。なお、この石造露盤は、欠失部を竜山石に似た長石（^{おさいし}兵庫県加西市産出）で補い、旧状に復原して飛鳥資料館に展示する予定である。（大脇 潔）